

第4章：歴史を学ぶジレンマと喜び

Dilemmas and Delights of Learning History

担当：鉦悠介(広島大学大学院教育学研究科)

■ 著者情報

著者名：David Lowenthal

研究関心：文化遺産学(Heritage Studies), 歴史, 地理

経歴：ウィスコンシン大学マディソン校で歴史学の博士号を取得。1972年から1985年まで University College London で教鞭をとり、以降名誉教授に就任。Heritage Studies を一つの学問として認知されることに貢献した。2018年に死去。

主著は 'Geographies of the Mind'(1976), 'The Past is a Foreign Country'(1985), 'The Past is a Foreign Country, Revisited'(2015)



■ 訳しづらい用語

Hindsight：ハインドサイト

(「後知恵」という訳語が考えられます。しかし、「出来事の意義や性質について、それが起きた後に悟ったり理解したりすること」(Wiktionary 英語版)といった意味合いに近く、「後知恵」はこの論考で用いられているニュアンスとは逆にネガティブな印象を与えるために避けており、「ハインドサイト」という表記にしています)

■ 議題

- 共通のリファレンスの崩壊という難点に対する Lowenthal の対応策は何か？ 国民の共通教養のようなものまで志向する可能性を読み取るべきなのか、そうでないのか。
- 奴隷制や帝国主義といったテーマ的な歴史の扱いや、そこに「ハインドサイト」を含めて語ることは現在主義のリスクを伴うのではないか。そうであれば、Lowenthal にとって許せる現在主義と、許せない現在主義の境目はどこにあると言えるのか。

■ 概要

本章では、まず歴史が一般に考えられているよりも難しい理由について語られる。一つは、歴史学習に継続的に見られる困難性（未熟さ、現在主義、神聖と世俗の時代）であり、もう一つのグループは現在現れている困難さ（用語の崩壊、本質主義者の弁解としての歴史、ポストモダンの相対主義）である。そして、本章では歴史を学ぶ重要性について3つの理由を提示している。日常の事柄に対する歴史的理解の貢献。過去の異質さを認識すること。ハインドサイトという能力である。最後に、歴史の即時性を強調することが歴史教授を豊かにすることが提唱される。

■ 素人学問としての歴史

- 物理学や社会科学などの大学の他領域と比べ、歴史学は技術的な専門用語を持たないというアマチュアな性質がある。
⇒しかし、それは歴史学が簡単であるという意味ではない。継続的な努力が必要なものである。

■ 歴史理解に特に求められるもの

歴史は次の5つの能力が求められる。

1. 熟知：合意され共有された過去に関する、しっかりした共通のリファレンスの蓄積を認識し位置付ける能力。
2. 比較判断(comparative judgment)：異なり対立する幅広い情報源から証拠を取り出したり批判する能力。
3. 多面的な真実への気づき：なぜ見る者が異なると過去が違うように理解されるかについて理解する力。
4. 権威の価値を認めること：これまでの見方を盲目的に信じたり疑問視しないということ避けつつも、先駆者や流儀の恩恵を認めること。
5. ハインドサイト：過去を知るということは現在を知ることと同様ではないということ、そして歴史は新しいデータ、認識、文脈、統合が展開されるとともに変化するということへの気づき。

⇒特に1と5が以降に説明される。

■ 歴史を学ぶ継続的障害

未熟さ

- 幼い時期は現在に認識が限定され、過去や未来が想像できない。多くの人々が歴史に無知であり無関心である。私たちの大部分は出来事を時代順に見ることを理解するが、過去の時代の人々がいかに自分たちと異なるかについては曖昧である。

現在主義

- 現在に生きる自分の道徳性を普遍的な基準にして過去の社会を判断すること。若者にも大人にもその危険があり、また博物館・教科書・メディアにも見られるし、アメリカ以外にも見られる。

神聖 vs 世俗 の時代

- 過去の特定の時代を神聖視すること。多くの社会はその起源の時代に特別な価値を置く。暦やその構造によって、過去についての認識が影響を受けている???
- 歴史学者は過去と現在をできるだけ忠実に公平に理解する。一方で国家や民族などは歴史をアイデンティティや忠誠を育むために使う。

■ 歴史の現在的な難点

言説の用語の崩壊

- 人物・フレーズ・出来事などの共通のリファレンスが忘却されてきている。歴史的リファレンスがなくなること、議論の共通の土台がなくなり、奴隷制や帝国主義といった一般的トピックを除いて議論の土台がなくなってしまう。

本質主義者の弁解としての歴史

- 過去に奪った土地や物品などの返還に見られるように、特定の集団をその過去と同一視し、歴史を集団ごとに本質的であると捉えること。学校歴史も、感情を重視した教育になっているが、それは歴史を議論できないものにしてしまう。

相対主義的なニヒリズム

- (Seixas が本書で示すように) ポストモダンの相対主義が歴史学習の障害になっている。歴史の特定の情報を獲得することではなく歴史的に考えることが歴史の必要性である。

■ なぜ私たちは歴史が必要で、どんな歴史が必要なのか

- 歴史的思考が日常の事柄をやりくりするのに不可欠である。何がなぜ起きたのかについての合意された理解を取るために、私たちは記憶と記録を他者のものと比較する。(例：1931 の AHA の Carl Becker による演説)
- Becker の演説は、歴史的探究の習慣を獲得すべきという教訓を示している。
- 歴史的な関わりは不可欠というだけでなく不可欠なものであり、あの歴史やこの歴史が自分に関係ないということは重大な誤りである。私たちは十分に歴史的な生き物であり、私たちの意識と記憶は近いか気にも遠い過去にも結びついている。現在の合理的な行動には自分だけでなく他者の過去への洞察も必要とする。

■ 過去の言いようのない奇妙さに気づくこと

- 教師の最も困難な課題は、歴史の古さをアクセス可能でありつつも、言いようのない奇妙なものとして扱うこと。このような理解のためには過去へのエンパシーだけでなく、断絶された違いについて気づくことが必要。
- 普遍性は歴史的には些細なものである。多様性こそが歴史の核である。歴史家の最も困難でやりがいのある仕事は、あらゆる過去が現在とは全く違うことをわからせること。
- 教師は過去の遠さや奇妙さをどうやったら気づかせることができるのか。それは過去のダイナミックで見事な描写に触れることでなされうる（例：Colonial Williamsburg の展示）
- 見慣れない過去に触れるために、以下のような文献が推奨される。
 - (1)ヨハネ黙示録(*Revelation of Saint John the Divine*) (2)*Montaillou* (3)*Out of Egypt* (4)*Akenfield*, (5)*Surviving the Holocaust*, (6)*Patterns of Intention*

■ ハインドサイトの効能

- 歴史的エンパシーは魅力的なものだが限界もある。歴史家はハインドサイトという認識モードによって、その当時の人々だけでなくのちの展開も視野に入れた独自の発見ができる。
- ハインドサイトには、過去の当時の人々に対する優越感の幻想や、出来事が他のようには起こり得なかったかのような一貫性を持たせるリスクを持つ。
- それでもハインドサイトを行わないことはできない。遠い昔に起きたことを理解するには、当時の人々の考えだけでなく、現代の私たちの思考を加えなくてはいけない。カエサルを理解するには、彼が信じていたことを知るだけでなく、彼が無知で偏った考えを持って先見の明に欠けていたことを知ることも同じぐらい重要だ。
- ハインドサイトは他者に対して自らの過去の理解を伝えるためにも不可欠なものである。なぜなら、歴史家は物語の形で知っていることを用いなければいけないからである。
- ハインドサイトによって、過去はアップデートされ続けるため、自分たちが知っていることも古くなる。
- 若者もすでに歴史の参加者であることを確信させるように教えるべき。Wertsch, Wineburg, Levstik, Rosenzweig が本書で述べるように、生徒は歴史に対してもっと楽しく、能力を発揮しうる。
- 博物館や史跡の Public Historian が歴史の即時性や関与の感覚を生徒に感じさせることができるし、それによって生徒や教師が歴史をアクティブで省察的なものにする。